

辻のあやかし斬り夜四郎

呪われ侍事件帖

井田いづ Idu Ida



アルファポリス文庫

<https://www.alphapolis.co.jp/>

序

冷たく吹いたつむじ風が色づいた落ち葉を巻き上げて、たまは思わず身震いした。この破れ寺に火鉢などという気の利いたものはない。庭先を見やれば、寺に棲みついた鳥が一羽、舞う落ち葉と戯れるようにして遊んでいる。

町はずれのこの寺で、たまと夜四郎は揃って紙に筆を走らせていた。たまがあやかしの絵を描き、夜四郎がそこに物語を書き添える。

墨で描かれるのは、あやかしたちとその物語だ。彼らを忘れないための、二人で紡ぐあやかし手帖。百八の物語を集めるためにこれを作るようになってから半年が経とうとしていた。

「夜四郎さま」

たまは筆を止めて侍を見上げた。十四を数えるたまよりもうんと大きいその背中はずいぶんと疲れて見える。

「手帖も厚くなりましたね」

「そうだな」

「すぐですよ、百八なんて」

「そうだといい」

夜四郎も筆を止めて頷いた。

最初こそ、その数にたまげたものの、一緒に奔走するうちにそう遠くない目標に思えてきた。なにせ、たまはしょっちゅうその手の話を持つてくる。夜四郎の悲願も、うまくいけば年内に達成できるのではないか。

時折その先のことを考えてしまうが、まずは目の前のことを一つずつ。急いでもろくなことはなし……というのはたまの座右の銘でもある。

二人で描き終わったものを確認して、それから満足そうに夜四郎は頷いた。

「それだけ長いこと、おまえさんの世話になつていふことだな」

これからも頼むぜ、という夜四郎に、たまはドンと胸を叩いて見せた。どちらかといえば、たまが世話になつていふ面の方が大きいのだが、あの日交わした約束は持ちつ持たれつ、だ。

もしもあの晩、あの辻で出会わなかったらと、たまはふと考える。

傍らで、風に遊ばれてばらりばらりと手帖が捲れ、一番初めの頁が開かれた。

この頁が描かれたのは、たまと夜四郎の出会った、まだ春の香りが残る頃……

壺話目 ろくろくび

○

くらい夜だった。

びゅうびゅうと冷たい風が吹きつけている。その中を女は軽い身なりで——それも裸足のまま歩いていた。風に巻き上げられて乱れた髪が顔にかかってもお構いなしに、女は歩く。

すでに夜深く、通りにはほかに誰の姿もない。

一歩、また一歩と踏み出すたびに小石が柔肌に食い込んで血を滲ませる。それでも女は止まらない。ただただうつろな目でどこかを見つめながら、灯りの落ちた道をどこへともなく進んでいく。

——ああ、悲しい。

——なのに、愛おしや。

——ほんとうに、恨めしや。

きつと迎えに来るといった男を、女はずいぶん待ち続けた。首を長くして待ち続けた。あんな奴を信じるなんて馬鹿な女だ、あいつは逃げた、おまえを捨てたのだと周りからどんなに諍もとられても、それでも女は諦めきれなかった。

その間、春が何遍来たことか。夏が、秋が、冬が何遍来たことか。

どれだけ待ち続けてもあの男はついぞ女の元へは来なかった。細々と来ていた便りすら途絶えて久しい。それでも女は約束一つを信じて待ち続けていたのだ。

——ほんとうに、ひどい人。

あの盗人は人の心を盗んで、人の一番の宝を盗んで、一体どこへ消えてしまったのだらう。何処かでのうのうと生きているのだらうか。一緒に消えてしまったあの子はどうなったのだらう。きつと母である自分の顔も——存在すら知らないで生きているのだらう。

何もわからないのだ。女は何一つ知らなかった。

——全てを知りたい。苦しいくらいに憎らしい。

——けれど何も知りたくない。怖くて、恐ろしい。

こうも無力に裏切られるのなら、たくさんの季節を無駄にするくらいなら、せめてあの男に一泡吹かせてやれたらよかったのに。一言己が悪かったと、迎えに行けなくてすまなかったと言わせてやれば、それだけで。

今日も町の何処にも男はいなかった。家にも勿論来なかった。便り一つ来なかった。ぷつん、と女の中で何かが切れた。

女はようやくその足を止める。目の前に影を落とすのは、見上げるばかりに背の高い大きな松の木。

「ああ、恨めしや——」

吹いた風に首を長くした女の影がぶらりと揺れる。

壺

いつ頃からか、その辻には辻斬りが出るらしいとけつたいな噂が立っていた。しかもただの辻斬りではない、その形をしたあやかしだというのだから余計に不気味だった。

噂好きな人々の口にあやかしの話が絶えないのは常のことだし、昨今流行っている怪談の数々も今に始まった話でもない。……ないのだが、よりにもよって一人で出かけている時にそれを思い出してしまうなんて——お遣いからの帰り道、たまは思わず身震いした。

堪ったもんじゃないとたまは思う。だつて件のその辻は、たまが働く団子屋の目と鼻の先にあるのだ。何処か遠いお城なり、知らない土地でのお話ならともかく、きわめて身近な場所なのがいけない。つい気になって、ついあれやこれやと考えてしまつて、殊更怖いつたらないのである。ひゅうどろろ、そんな風が吹くだけで毎度毎度震え上がってしまうのも、仕方のないことなのだ。

その辻のあやかしについては法螺話だという人も少なくはない。

なにせ、誰が調べても何の痕跡も見つからないのだ。誰かが人らしき影を斬るのを遠目に見た人はいる。誰かがそれに斬られる様を遠目に見た人もいる。

それなのに斬られたはずの死体を見た人も、斬ったその辻斬りの姿をハッキリと見た人もどこにもいないのだ。

辻に差し掛かるところで辻斬りを見たような気がして、おっかなびつくりそこへ行つてみれば死人も咎人もいなく、もぬけの殻だったとか。一度噂におびえた町の人に泣きつかれた岡つ引きが洪々様子を見に来た時もやはり何も無い。

それが一層話を不気味に仕立てていた。

辻斬りはやはりあやかしで、斬った人を妖力で消してしまつたのだろうか。それとも異様に片付けが上手い人間の辻斬りなのだろうか。はたまた酔っ払いの見た幻だったのか。

あんなのはただの作り話さ、怖がることはないさと団子屋に來た客も言っていた。事実人が斬られていたとして、その惨劇の現場に血の一滴もないなんてことはあり得ないのだからと。

しかし、そんなことはたまにはどうだっていい。

——嘘でも本当でも、怖いモンは怖いのよ。

菓子箱を包んだ風呂敷をぎゅっと抱えて、たまはだんだんと駆け足になっていく。お得意様に饅頭を届けた帰り道である。頼まれたものを届けて終わり……のはずが、お茶をいただくついでに当の届けた菓子までいただいて、ついには昼餉まで馳走になつてしまったのだ。得意先の老夫婦はたまを孫娘のように可愛がつて、会うたびに色々な話をしてくれるものだから、帰る頃にはとつぷりと日は落ちていた。

たまの帰りがこうやって遅くなるのは今日が初めてのことでもない。実年齢よりもう少しばかり幼く見られがちなたまは、行く先々でなんやかんやとご馳走になるものだから、おかみさんもだんなさんも帰りが遅くなることは想定済みだろう。

ここの辺は物騒な噂も（辻のあやかしの話以外は）聞かないし、たまとしてもきつと二人ともそんなに心配はしていないだろうとも思う。今日はお店の方もそう忙しくはなかったから、その点についても何ら問題はない。

問題は、帰りが夕刻を過ぎてしまったということだ。

暮れ六ツの逢魔時——まだそう遅くもない時刻だというのに、通りに他の人影は見当たらない。きつと家の中にはいるのだろうか、通りを歩くのはただけである。があがと鳥のわめき声だけが響き渡る。

なにも一日中こんなに閑散としていくわけではない。

朝昼は辻売りや町人なんぞで賑わうし、夜も屋台や蕎麦屋が出たり飲み屋が開いたりで大いに……とはいかないまでも、多少なりは賑わっている。しかしなぜかこの時間帯だけは、ぼつかりと空洞が空いたみたいに人の気配がまるきりしなくなるのである。

仄暗くなりかけた空の下、件の辻に差し掛かる手前——そこでたまは足を止めた。

人影だ。

見れば二つの影が忙しく動いている。追いかけているのか、喧嘩でもしているのか。背格好を見るにどちらも男だろう。それがどんどんこちらに近づいてくる。

たまは菓子箱を胸にきつく抱いて一歩退がった。

まさか、件のあやかしとその被害者か。もしくはただの連れあつて歩く町人なのか。安心していいのか、いけないのか。考えている間にも影は近づいてくる。

せめて身は隠そうと天水桶のそばから首だけを出して、目を凝らして——すぐに答えは出た。

迅、と風が鳴いたように聞こえた。

だんだんとはっきり視えてくる。片方の男は抜き身の刀を手にしていた。もう一人の首を横薙ぎに一閃したのだと遅れて理解する。血飛沫の如き黒煙がぶわりと男から噴き上がるのもわかった。それら全てがほとんど落ちかけた夕陽によって影絵になって、男の首が飛ぶのまでもがよく見えた。どさりと男の体が地面に崩れて、遅れて頭が落ちた。

たまは必死に手で口元を押さえた。悲鳴は何とか呑み込んで、それでも、齒が鳴ってしまふ。

一部始終視てしまった。辻のあやかしの蜜行を視てしまった。
たまはもう一步退がる。

震えた腕から空の菓子箱がこぼれ落ちて、がらんがらんと派手な音を立てて転がった。抜き身の刀を握った男の目がこちらに向く。のっそりと歩いてくる影に叫ぼうにも、息を大きく呑み込んでしまつて声も出ない。

「ひ、い……っ」

こちらを向いた男の口が開いたような気がして、男が何かを言いかけて……。それを見届ける前に、たまは意識を手放すことを選んだ。

たまは、おっかないことは嫌いなのだ。



——実に恐ろしい夢を見た。

人斬りの現場を見てしまい、辻斬りに見つかってしまった夢。きつと夢に違いない。絵草紙か何かを眺めているような——とにかく現実味のない光景だった。

夕闇に沈む辻、鋭い風切り音、ごろりと落ちた首の影、噴き出す血飛沫、そしてこちらに向かつてくる辻斬りの——

はっとたまは意識を覚醒させた。

あれからどれだけ経ったのだろう。外は既にとつぷりと夜に浸かり、星空が破れ寺の役割を半ば放棄しつつある天井の隙間から、顔を覗かせている。

——此処はどこだろう。

たまは痛む頭を押さえながらのそりと身を起こした。枕元には菓子箱がきちんとお行儀よく並んでいる。袂に入れておいた巾着はそのままだし、身に着けた何もかもが普段のままである。当然だが切り傷一つない。

「……たまは道中で、居眠りを……？」

まさか！ たまは思わず頬をべちんと叩いてみた。ちゃんと痛い。痛いということ

は、今はもう夢の中などではない。そんなまさか！　いくら抜けたところのあるたまとて、道端で眠りこけるなど、そこまでうっかり者ではないはずだ。

たまは座りなおして、何処から夢なのかと考えてみる。菓子箱の中は空っぽで、お遣いに行ったのは夢ではない。腹の虫もおとなしいのだから、昼餉ひるけをいただいたのも確かだ。

しかし帰り道に、こんな破れ寺などあっただろうか。あったとして、いくら疲れていたとしても、そんな所でわざわざ居眠りするだろうか。店は目と鼻の先だったのに――そもそも、たまは辻を歩いていなかったか。歩いていたはずだ。帰るべき場所の近くにいたのに、わざわざこんな所に移動するものだろうか――

くん、と鼻を鳴らすとやや焦げ臭いような、それでいて甘く香ばしいような香りがした。近いものはからいもだが、今は春である。やや時季外れだ。耳をすませば、どこで人が動く音も聞こえる。

どうやら誰かが道端で眠りこけたたまを、ここまで運んできたらしい――とたまは結論付けた。

その人がただの親切な人なのか、はたまた、たまを気絶させてここまで運んだ人攫いなのか（だとしたら随分気の抜けた人攫いにはなるが）、もしくは何も知らないたまたま近くを通っただけ人なのかは知らない。知らないが、今は逃げるに限るという

点は確かだ。

もし、相手がいい人であった場合はひどく無礼なことになるが、それなら後から店の人と一緒に礼と謝罪に来ればいい。問題は相手が悪い人だった時だ。相手が人攫いなら今のうちに逃げねばかだ。大間抜けだ。

――ようし、今のうちに逃げちゃおう。

たまはすぐにそう決めた。

音を立てないように這うように移動して、手近な障子戸（の体をギリギリ保っているだけの板）をそつと横に動かした。

隙間からそろりそろりと軒先に出れば、たまの履物がきちんと揃えて置いてある。たまは大方ガサツに出来ているので、履物まで整然としていると、いよいよ自分できまで来たという説はなくなった。

はたしてたまを助けた理由は親切心からなのか、邪な企こころみあつてのことなのか――たまにはその所がわからないので、気休めに背後に向けてお辞儀を一つしてから、そそくさと出ていくことにした。

たまはめっぽう怖がりだ。

奇怪な事象やあやかし、怪談話は勿論、怖い。しかし更に怖いのは生身の人間だと知っている。人斬りも人攫いも怖ければ、怒ったおかみさんも大変恐ろしい。帰るの

が夕方ならまだしも、無断でこんなにも遅くなってしまつて、きつとうんと叱られるに決まつていた。

古い木のつぼな影、植え込みの低い影、隙間から月明かりの溢れる塀の傍……と目立たぬように抜き足差し足で移動して、これまた古くて崩れかけた門まで歩く。首だけを門から出して見渡せば、右手の奥に橋が架かつて、見覚えのありそうな景色が続いている気がした。なるほど、ここはあの辻の近所らしい。

だだっ広い境内にはたまの歩く音だけが小さく響いていた。他に音はない。そこでふう、と気を緩めたのがいけなかったのかも知れない。

背後からぬうつと影が伸びて、頭の上から声が降つて来たのだ。

「おう、元氣になったか。帰る前にちと話を聞きたいんだが……」

振り返る。見上げる。目が合う。

音もなく気配もなく、いつの間にかそこに人がいたのである。

見覚えがあつた。

無造作に束ねられたボサボサの総髪に、鋭い瞳。無精ひげが生え放題で、身につけた小袖も袴も随分くたびれて所々ほつれて見える。

浪人者だろうか。よっぽど家計が火の車なお持なのか。いや、そんなことはどうでもいい。ただ一つ確かなこと——あの瞬間は顔も姿も真つ暗で見えていなかったのだ

が、それでもたまは確信していた。

——この人、あの辻斬りの……！

さつき見た、あの影を纏つた男だ。気づいていと思われてはいけない、悲鳴を上げてはいけない、そう思いつつも、ひゅつと喉を息が通つてから、

「ひいいいやあああああああ！」

今度はしっかり悲鳴が出た。

二度目なので、流石に失神まではしない。代わりに夜闇を裂いて響き渡つた悲鳴に、男は耳を押さえる仕草で応えた。視線ががち合うと、男はどこか安心したように息を吐く。

「よかつた、そんだけでけえ声が出たら大丈夫そうだな。打ちどころも悪くなかつたらしい」

出た言葉は呑気なものだつた。あまりに呑気すぎて、得体の知れないものを感じた。たまはぞつとして後退る。

団子屋の娘にすぎないたまは、何処にでもいる非力な少女でしかない。帯刀している相手に背後を取られて、どうこうできる力も技も持ち合わせていない。しかし目と目を合せて、悲鳴まで浴びせたのだ。今更無視もできない。

必死に思考を巡らせた末、たまは相手の良心に訴えることにした。

「おおお許してくださいませ、いい命ばかりは、おおお助けくださいませ！」
言葉の勢いのままその場に膝をついて、頭を地面に擦り付けて懇願する。男としても予想外の行動だったのか、観面（くわめん）に狼狽（ろうたい）し始めた。

「待て待て、俺はまだ何も言っていないだろう！ おまえさんは何を言っているんだ」

「たたたたまは何も視てはおりませぬ！」

「わざわざ正直にどうも！ いったい何を言っているんだ。まずは落ち着いてくれねえか」

男は両手を上げて身に覚えがないと訴えるが、一種の威嚇行為にも見えなくもない。怯えきったたまに、根がいい人なのだろう、男は距離をとってしゃがみこんだ。目線は合わせて、両手は降参を示すように上げられたままだ。

この男が言うには、夕刻に幼げな女の子が一人でいて、しかも突然ひっくりかえって気絶したのだから、その場に放置もできずに寺に運んだということだった。なかなか目覚めず、しかし目立つ怪我もなく、つい気を緩めていたところ、突然起きて出ていく気配がした。それで仕方なく背後から声をかけたのだと釈明した。

それなら誰か近くの家の人を呼んでくれとも思わなくはないが、できない事情も時にはあるものだ。少なくとも、たまの目には男が嘘をついているには見えな

かった。

「すまん、怖がらせるつもりはなかった。やむを得なかったんだ。あの通りは、まだ危ないモノが……」

はたと男が言葉を止めた。一方、存外真つ当な応対をする男にたまはほっと安心して、そんな様子には気がつくはずもない。

人間にも良いものがないて悪いものがないように、きつとあやかしもそういうものなのだと早合点。たまこそ申し訳ありませぬ、と頭を下げた。

「ご親切に、ありがとうございます。辻であやかしさまが、な、為されていたこと、たまは一切合切何も視てはおりませぬので！」

言ってから、アツと口を押さえる。視ていないのなら言わない方がよかった。視ていないのだから。男はにやりと笑った。

「はあ、そういうことか。合点がいった」

たまは両手で顔を覆った。要らないことばかりこぼすのだ、たまの口は。男は立ち上がると、すたすたと距離を詰めた。たまは縮み上がるばかりで一步も動けなかった。

「そう、おまえさんに聞きたかったんだ。視えているのか、どこまで視えるのか——全部視ていたんだな」

瞬間、男の輪郭がひどくぶれて、たまは顔をそむけた。手の届く距離にいるのに、

笑った男の顔が、よく視えない。

しばしば客から聞く怪談では、おどろおどろしい化け物たちが『見たくらなう』と地の底を這うような声で責め立て、追いついて、襲ってくる。そう、男がいくら親切でたまを介抱してくれた良いあやかしだとしても、それは変わらない。

——彼は町を騒がす、辻のあやかしなのだ。

たまはまた地面に這いつくばった。男が狼狽^{うろた}えたのを空気で感じ取るが、そんなものは関係ない。

「ももも申し訳ございませぬ、辻のあやかしさま！」

「ま、待て、なんだって？ 辻のあやかし？ この俺が？」

「血みどろ、ぶしゆりな事件などたまは視ておりませぬ！」

「そうら、はつきりと視ているじゃないか！ いや、俺は怖がらせたいわけじゃなくてな、確かめただけなんだよ。なあ、おまえさんは俺を、俺と一緒にいた奴を視たんだな？ あの辻で、俺があやかしを斬ったのを視た」

「ひええ、やはりお斬りに……た、たまは口が裂けても誰にも言いませぬ！」

「信用ならん口だが……いや、今はそんなことはどうでもいい。信じてはもらえんだろうが、俺はあやかしを斬る側だ」

「あ、あやかしを？」

「だから、教えてほしい」

そう言つて、男は己の目を指さした。そしてたまの目を覗き込む。逃げようとして、たまは尻もちをついた。

「なあ、きみにはあやかしの——彼方^{かなた}に棲むモノの姿が、はつきりと視えているな？」

「……」

たまは思いつき目を逸らした。

人の世である此方^{こなた}の反対側には、あやかし、幽霊、その他化生^{けしう}の存在する彼方^{かなた}の世がある。普通、それは人の目に映ることはない。

そこにいる存在に視えると気がつかれてはいけなさと、遠い記憶の中で、父によく言われていた。あやかしとは言葉を交わしてもいけない。近くに寄らずに互いの境界を守っているべきだと。

うっかりしていたと唇を噛む。だって、大体のあやかしは知らぬふりして通り過ぎれば、ここまで関わってほこないから。攫^{さら}われたり脅^{おそ}されたりしたこともない。

そういう存在がいるのは物心ついた頃から知っていた。けれど、今日まで深く関わったこともないのだ。

たまの目は常人と変わっている。

左目に此方^{こなた}を、右目に彼方^{かなた}を映し、二つ重ねてその境界を視る——ゆえに、たまは

人一倍、怖いモノを見つけやすい。あの角に老婆がいる、誰もいない部屋に子供がいる、幼いたまは何度か口に出してしまったこともある。それを父は優しくたしなめてくれたものだった。

異なる世が視える者は、良くも悪くもその橋渡しをしようと言われている。胡乱なものに狙われる。怖いことに巻き込まれる。だから、気づかれてはいけない。

この男はたまの目が特殊であることを感じ取ったらしい。「ようやく俺にも運が向いてきたというわけだ。なあ、おたま、その目でもう一度、今度はよくく視てくれねえか。俺は……あやかしのなか？」

なんで名前を、と言いかけて、そういえば自分で「たまは」「たまが」と連呼していたことを思い出して閉口する。

「頼む、俺はまだ……」

声に滲む切実な響きを感じて、たまは恐る恐る男を見上げた。

じっと見つめて、そっと左目に蓋をして、次に右目に蓋をして、おやつと動きを止めた。おかしい。何度やっても同じ景色に首をひねる。左の目にも、右の目にも、頭からつま先まで男は同じように映っていたのだ。

あやかしの視え方は時によってまちまちで、体半分がゆらゆらと蜃気楼のように揺れて視えるだとか、頭だけがちかちかと光っていたとか、影絵のようだとか、はたま

に残像のように視えるだとか、そういう風に映るものだった。たまがあやかしを視る時、左の目に映る姿と、右の目に映る姿は決まっていればならぬのだ。

見る。視る。黒い陰りのようなものを背負った侍がそこにいる。決して生きた常人のそれではないが、だからと言って彼方の存在とも視え方が違う。右の目にも、左の目にも、はっきりと同じように映り込む。重ねた景色に違いはない。

これではまるで――

「お、お侍さまは、あやかしではないのですか？」

たまは驚いてこぼした。そういえば、あやかしを斬るのだと彼は言っていた。

――つまり、彼もたまと同じ世界を視る人間なのか。

たずねてみると、彼は少しだけほっとしたような表情になって、いいや、と首を振った。

「生憎と、俺の目には人もあやかしも同じに見える。どちらも見ることはできるが、違いがわからないのだ」

「すみませぬ、たまはてっきり……」

「この俺が、あやかしだと？ 俺はまだ死んじやいない」

それにしても、とたまは改めて男を視た。

端的に言うならば、男は影のように仄暗かった。ちょうど真上に薄く影を落とした

みたいに、ほんのりと陰っている。夜とは言え、月明かりの下、木陰、篝火かがりびの側でも光の加減が全く変わらないのはいくらなんでもおかしい。

そのくせ、顔の造形ははっきりわかるのだから不思議である。輪郭は蜃気楼のように揺らめいては止まって……を繰り返していた。

「だが、きみのように普通の身体でもない。あやかしに近い、故にきみも誤解したのだろうな」

「えっ」

あやかしじゃないと言ったのに！

たまが驚いて見上げると、男は楽しそうにからからと笑った。子供みたいにあしらわれたと気がついて頬を膨らませると、それを見て彼はまた笑い、軽い調子で詫びた。詫びてから、不思議なことを言った。

「嘘でも冗談でもないさ。事実、俺はまだ死んじやなくて、普通に生きてもいいない。どちらも正解だということだ」

それは一体どういう状態なのだとたまは首を傾げた。なぜかだろうか。たまはあまりその手のものは得意ではない。

男は歩こうか、と町のほうに顎をしゃくった。

「きみもそう長くここにいるわけにもいくまい。見送るついでに、一つ俺の話を聞い

てくれないか」

「はあ」

たまはおとなしく後に続いた。少しばかり前の話にはなるんだが、と男は前置きした。

「家にあやかしが紛れ込んだんだ。人知れず退治しようと意気込んだがしくじってな、俺はまんまと身体を奪われて呪いをかけられた。だが、その時に完全に死んだってわけでもないらしい。半死半生といったところかな、普通に生きていた頃と加減は違うが……あやかしみたいに常人に視えないということもない。だが、気がついてもらえないこともある。相手が認識しなけりゃ、俺はあやかしみたいに視えないものになっちまう」

要はどっちつかずの存在なのだと語る。口調は淡々としているが、双眸そうまうはまっすくに目の前の闇をにらんでいた。

男が蜃気楼のようにゆらめいているのは、此方こなたと彼方かなた、そのどちらの存在でもあるから。だから、たまの両目に変わらなく——それでいておかしい風に映っているのだ。

あやかしを斬る半死半生の侍——それが、辻のあやかしの正体。

本題に入ろう、と男が手を叩き、まだ本題じゃなかったのか、とたまは驚いた。

「細かいことは追々話すが、俺の身体を取り戻すためには、此方こなたに縛られた百八のあ

やかしを彼方に還す必要がある。そうあやかしと約束した」

「百八！ 多すぎやしませんか！」

「まあな。世の中に妖怪譚がありふれていると言っても、俺には生きた人間と紛れ込んだその区別がつかない。まるきり人の姿から外れてりゃあ楽なんだがな……、そこで、おたま。きみの出番というわけだ」

急に言われたので、たまは前につんのめる形で急停止した。なぜそこでたまが出てこなければならぬのか。

「あ、あのう、たまはただの団子屋の娘です」

「いやいや、謙遜することはない。俺一人では、辻に居座るしか術がないんだからな。あやかしの出やすい時間まで粘って、怪しいやつを見つけたれば相手が人かあやかしか数日監視して……それでも尻尾を出さないと斬れるもんも斬れない。だが、おまえさんならわかるんだろう。どれだけ巧妙に隠れていても、視ればそれとわかる」

「おお待ちください！ た、たまはともにお役に立てるような者ではございませんぬ！」

たまは大慌てで頭を振った。堪ったもんじゃない、と思う。どうして、怖い話に首をつっこまねばならないのか。

百八のあやかし——実際にはこれまでに男一人でもどうにかしているだろうから、

残りはもつと少ないのかもしれないが、いつ終わるとも知れない話なのだ。ただ視えるだけの、たまの力を買い被られても困る。

第一、一介の町娘には危険極まりない話だ。帯刀した侍に、未知のあやかし。侍である彼は戦いなれていようが、たまは精々包丁しか握ったことがなく、包丁だってまな板の上の魚や豆腐と闘うばかりの日常なのに。

そんな小娘を連れて、彼はどんなあやかし退治を演じるというのだろう。まさか囃おことして……というわけでもあるまい。

「たまは身を守る術も知りませぬ。きつと足手まといにございます」

「むう……」

男は渋い顔になる。顎に手を添えての思案顔。

この隙に逃げてしまおうか、なんて考えもよぎる。

しかし男が居合の達人なら一瞬でお陀仏だからじっとしている方が吉か、もし斬るつもりなら既に斬っているはずだろうから今からでも逃げるが勝ちか……などと迷っているうちに、男がまたたまの方に目を向けた。たまは逃げそびれた。

「なるほど、まずはきみを安心させねばならんな。確かに、いきなり巻き込むのも、道理が合わないか」

「そうなんです」

「わかった」

「おわかりいただけたでしょうか」

「ああ、ちと考えて出直そう」

「……出直す、です？」

聞き間違いだろうか。たまの問いかけに男は薄く笑っただけだった。

言うことを聞かせるために刀で脅すだとか、無理矢理に連行するつもりは（少なくとも今は）ないらしい。話くらいは聞いてくれるかい、と聞かれて、

「あい」

うつかりたまは頷いてしまった。できないことをできるといつつもりはないが、できる範囲の話なら、たまは頼まれごとに弱いのだ。

再び歩き出した二人は、あつという間に橋のたもとについた。驚いたことに、見覚えのある橋だった。

「ここからは近いのか、きみの家は。腹が減っていたら……」

「いえ、たまの家には団子やお饅頭がごいますので、ここまでで！」

「ふうん、団子に饅頭ねえ」

男は考えるように明後日の方向を見て、またたまの方を向いた。

何を考えているのか、楽しんでいるのか、さっさとお暇しなければと、たまは己に

言い聞かせた。余計なことを口走る前に、早期撤退が肝心だと言い聞かせる。

「で、では、お待さま。たまはここで」

「そうだおたま、名乗り忘れていたな。俺は夜四郎だ」

「夜四郎さま、でございますか。その、本日はありがとうございます！」

唐突な自己紹介に首を傾げながら、たまは急ぎ足で橋を渡る。背中に声がかける。

「あやかしは斬ったが、近ごろは怪しい人間も多い。近くまで送ってやろうか？」

「結構でございます！」

笑い声がして、風が吹きつけた。せめてお辞儀だけでもしておくべきかと振り返るが、渡り切った橋の向こうには深い闇が落ちていて、何も見えなかった。ぞぞぞと背筋が粟立って、たまは跳ねるようにかけ出した。

たまはかけっこなら得意なのだ。

弐

結論から言えば、たまは大して叱られなかった。

おかみさんもだんなさんも「ずいぶん遅かったねえ」と目を丸くはしたが、「まあ、娘っ子一人で出歩くんじゃないよ」と言っただけだ。

身構えていたたまとしては拍子抜けだったのだが、半刻もすると誰の口からも昨日の晩の話題は出てこなくなり、翌日にはたまもけろりとして普段通りに戻ったのである。

たまの働く「志乃屋」は通りに面した表店で、それなりに繁盛している。ただ、店で食べていくというよりも買っていく、あるいは家まで届けるように頼む人が多い。春の穏やかな陽気の下、店先に並べた床几にはお客さんが数人腰かけて、団子や麦湯を楽しんでいる。

「おうい、おたまちゃん、一皿！」

頼まれればすつ飛んでいく。世間話をしながら、次のお客が来れば声をかける。

たまは注文を取って、団子を渡して、また次の人の注文を取って、近場に届けて……そうやって目まぐるしく働いていると、おかしなものが視えることも、それについて考えることもなかった。

あさり売りや豆腐売りが通り過ぎて、何人か見知った顔や見知らぬ顔が客として来ては帰って、昼過ぎになって、おかみさんから休憩しておいでと声がかかった。ついでに炙りすぎた団子と茶も出してくれたので、たまは早速店先で食うことにした。

どのみち、今の時間は客が少ない。たま一人店先で食べても営業妨害にもなるまい。熱い茶に、糖蜜のかかった団子、貰った漬物をそえる。

ほくほく、ぼりぼり、ごくごく、もちもち、ぼりぼり、ごくごく……

こうしてのんびりと陽に当たっている今はなんという贅沢な時間だろうと堪能していた。

——大抵、そういう時に来るものである。俗に言う嵐というものは。

「よう」

覚えのある声。振り向いたら、覚えのある姿。嵐も嵐、大嵐、そこにいたのは辻のあやかし改め、夜四郎だった。

食べ終わった頃でよかった、食べている最中だったら取り落としていたにちがいない——たまはあんぐりと口をあけた。

「や、夜四郎さま、なぜここに」

「なぜもなにも、昨日話なら聞くと聞いたじゃないか」

確かに言った。たまは昨日の自分を恨む。

しかし、昨日の今日で住処を言い当てられてしまっただけ！

驚くたまに、夜四郎はあっさりと言う。

「おたまが言ったんじゃないか、家は団子屋だと。空の菓子箱も持っていたし、前掛

けにも屋号が入っていた。あの辻から近いのはこの店だしな」

どうやらたまの口が軽かったらしい。慌てて口を押さえるが、出てしまった言葉は戻らない。迂闊な己を重ねて恨みながら、たまは慌てて立ち上がった。

お客様ならもてなさなければ。ちようどおやつも終わったところだ。

「で、でしたら、どうぞ……お団子でよろしいでしょうか」

「ああいや、すぐに終わる用事だ。団子を食いに来たわけではないさ」

「ここは団子屋でございますが」

言いながら、たまは改めて夜四郎を観察した。

お天道様の下にもいても相変わらず、日陰に立っているかのように陰っている。かなりの長軀で目立つはずなのだが、通りを歩く誰もこちらに注意を向けていない。店の中に目を向けても誰もこちらを注視しているわけでもない。

あやかしと人の狭間にいる、呑気で、町娘にも気さくな風変わりな侍。彼はどこから来て、どうやって暮らしているのか。あの寺にはいつから棲みついているのだろうか。たまは彼にどう対応するのが正解なのか、考えあぐねていた。

「今日はおまえさんに相談があつてきたんだ。おっと、俺の手伝いの件じゃないぜ、今回のところは」

夜四郎は静かに床几に腰を下ろした。とんとん、と隣を促されるので、たまは間を

あけて座った。

「おまえさん、これまで——十年くらいか？ 視えることをどうやって隠してきたんだい。どれほど幸運だったかは知らんが、考え事がすぐに顔に出るきみのことだ。これからもそううまくとは限らないだろう」

「それは……そうですが」

たまとしては、これまで大丈夫だったのだから、これからも大丈夫なのだろうという漠然とした考えしかない。夜四郎は違うらしい。

「巷の噂話に耳を傾けてみな。どれがどこまで真実かは定かでないが、奴らはどこにだっている。昨日と同じ場所にいるとも限らないし、何かの拍子で——昨夜俺に見つかったみたいのに、思わぬ事態になることもあるだろう。おまえさんがそこは一番よくわかっていと思うがね」

常であれば、此方と彼方の往来は簡単に叶うものではない。触れようとして触れられるものでもなく、視ようとして視えるものでもない。ただ、抜け穴となる通り道がそこかしこにあるのもまた確かで、そういう穴を通して出てくるあやかしもいる。

そういったあやかしは非常に不安定な存在だ。迷子の根無し草が、より長く此方に居座り、此方に定着するために、彼らは人と縁を結ぼうとする。

食うか、囲うか、憑りつくか。縁に縛られてさえいれば、永く在れる。

「おまえさんはそういう意味で適任だろうよ。彼方^{かなた}を視るから、あやかしを認識できる。それが此方^{こなた}への橋渡しになる。一度認識されれば縁を結ぶことなんてどうにでもできるからな。視えるとわかれば、悪いあやかしはこぞっておまえさんと縁を結びに来るだろうな——どうだ、危険だろう」

そう言われてしまえばたまは何も返せなかった。

これまでは父が自然とたまを守ってくれていた。父が流行り病で亡くなってからも、あちらは鳥がうるさいから別の道を使おうだとか、父が使うなど言ってくれたこちらの道は避けるとか、辻は明るいうちに通って、それ以外は目を伏せたまま足早に過ぎるだとか、たまなりの方法で回避してきた。

昨日はたまたまうっかりしていただけで、昨日までは変な存在に目を付けられたこともないのである。

「そら、さっそくこれまで通りじゃなくなっているじゃないか」

「そうですが、どうすればいいでしょう。頑張って視えなくなるものならとくにそうしています。目隠しをするわけにもいきませぬし」

「いいんじゃないか、眼帯。おまえさんはそそっかしいが、そこまで鈍臭くもないだろう。一つやってみるのは手だぜ」

夜四郎は袂^{たもと}から巾着を引っ張り出すと、ごそごそと中を漁る。何が出るかと思えば、

細長いただの布切れだった。新品だ、とたまに押し付ける。よくもまあ、都合のいいものが出てくるものである。

たまとしては冗談のつもりだったので、苦笑いのまま布と夜四郎とを見比べた。

「ええと、目はすこぶる健康なのにいきなり隠すのです？ とても怪しくないですか？」

「そんなもの、怪我をしたとでも言やあいいのさ。腫れ物でもいいが、医者にみせなきゃならなくなっちまうか。そこはまあ、上手く言えばいい」

「ええ……」

たまに考えろと言うのか。

病気だと店に出してもらえないかもしれないので、軽い怪我か少し調子が悪いとかにしておくのが無難だろうが、傷一つないのに怪我もへったくれもあったものじゃない。もしくはどこかで読んだ本の影響を受けたということにするだとか。

変に心配させることもないし、それがいいかもしれない。

夜四郎は本当にこれのためだけに来たらしい。布を渡すとさっさと立ち上がった。

近くに変なモノがないかを見て回るといのだが、間違いなく今一番の異物は夜四郎自身である。

「おたまがあやかしに襲われても、俺がいれば斬ってやれるが……ようやく見つけた、

貴重な目だ。みすみすあやかしなんぞに見つけさせるものかよ」

「エ、あのう、夜四郎さま、たまはあやかし退治の件はお断りを……」

「わかつている、わかつている、そちらは追々考えるさ」

まるでたまの言いたいことを理解していない風に、夜四郎は手をひらひらさせて無理矢理話を打ち切った。たまはむうと唇を失らせる。

この男、人の話をまるで聞いていないのではないか。確かに強引な手には出ていないが、たまを諦めるつもりもないらしい。

思わず半眼で見つめると、

「いやいや、なにもおまえさんが矢面に立つことはない。どこに妖しいモノがいたとか、客からそういう話を聞いたとか、それを教えてくれるだけでいいんだ」

などと言う。そうすると、単純なたまは、お話だけならとすぐに流される。

「それなら次はお団子を食べていってくださいね」

「ううん、そこも追々考えるところ」

「食べないお客様がいらっしゃると困ります」

「長居はしない。それに俺がいようがいまいが変わらんよ。言っただろ、半死半生、^{かた}彼方に片足を突っ込んでいるんだ。いると思えば見えるが、そうじゃなけりやあざりぎりまで近づかなきゃ視えないもんさ」

夜四郎は自嘲するように言ってから、そら、と通りを顎で指した。たまが目で追うと、旅装束の若い男が立っていた。彼は手近な床几^{しょうぎ}に腰を下ろすと、団子と麦湯を頼むなり持ってきた紙とにらめっこを始めた。

風が吹いて、振り返ると、夜四郎の姿は消えている。たまが旅の男に気を取られているうちに、さっさと帰ったらしい。言いたいことは言って満足したのだろう。

——もう、勝手な人！

たまは頬を膨らませた。どうせ、しばらくは飽きもせずに来るのだから、文句の一つくらいは許されると思いたい。貰った布を袂^{たもと}に仕舞って仕事に戻った。

翌日になって、たまは早速布を巻いてみることにした。試行錯誤の末にようやく巻けたのだが、姿見に映った自分は客観的に見てもおかしくて思わず嘔き出してしまった。

「夜四郎さまもこれを見たら笑ってしまうかも」

時折結び直さないと緩むが、動いてみても思ったよりも支障はなかった。存外に適応能力が高いのか、四半刻もしないで普段と変わりなく動けるようになってくる。だんだんと「これならば昔話の英傑に見えなくもないのでは」とさえ思えてきた。

もちろん、団子屋の面々は目を丸くして風変わりな看板娘を見た。

「あんた、どうしたのさ、その目は」

腫れ物じゃないか、怪我でもしたかと質問攻めにあったが、たまはけろりとして胸を張る。

「隻眼^{せきがん}おたま、志乃屋の新しい名物です！」

そう言って普段通りに開店準備を行えば、皆「まあいいか」と諦めた。そして意外にも、常連客のウケも悪くない。

「おたまちゃん、そいつはどうしたんだい」

目を丸くする人もいる。

「お、本当に眼帯娘じゃないか。こいつはいなせだねえ」

誰かに聞いてやってきて、からかうように囁き立てる人もいる。

たまはすっかり得意になって、半日もすればたまの眼帯姿は店にすっかりなじんでいた。

さて、昨日の旅人が再びやって来たのは、夕方に差し掛かる頃だった。

ぶらりとやって来て、昨日と同じように団子の皿を一つと麦湯を頼んで店先に座る。瓦版や姿絵を広げて思案する姿も昨日と同じである。

たまはなんとなく、その丸まった背中が気になった。

「こんにちは」

声をかければ、男は顔を上げて微笑んだ。

「やあ、本当に眼帯をしているんだ。志乃屋のおたまさんが風変わりな装いを始めたとかちこちの噂で聞いたけど」

「けっこうな噂になっているんですか！」

「そりゃあそうさ。しかし、器用な人だね」

しみじみと言ってから、俺とは大違いだため息をついた。

彼は佐七^{さしち}といって、聞けば、田舎から出てきたばかりだそうだ。働き口は縁を辿ってどこにかできたが、わざわざ出てきた目的は別にあるらしい。

人を捜していると言う。

「人捜し……ですか」

「そう。時に、おたまさん。きみはこの町に詳しいのかな。この店の前は見通しがいいし、人通りもある。色々な人を見ているわけだと思うけど、この人を知らねえかと思ってるさ」

そう言って、睨めっこしていた紙をたまに見せた。なんとも味のある——要はこれ一つを頼りに人捜しはいささか無謀とも思える一枚だった。

たまはハの字に眉尻を下げて、白旗を揚げた。

「むむむ、これだけでは……」

たまは六つか、七つの頃から志乃屋にいる。それなりに顔は広いと思っていたのだが、似顔絵一つで人捜しをできるほどではない。

「どなたです？」

「俺のおっかさんだ。名前はお滝、背の高い美人だつて話だが、親父が描いた素人絵と繰り返し聞かされた思い出話、これくらいしか手がかりがなくてなあ」

「お滝さんですか……」

たまは答えに窮した。なにせ、たまの知っているだけでも近所のお滝さんは四、五人いる。見たところ十八ほどの佐七の母に当てはまる、と考えると今度は逆に条件に当てはまりそうな人が消えてしまう。離れて暮らす子のいる母に覚えはなかった。

「むう、お滝さんはいっぱいいるのですが……」

「ああ、そりゃそうだよな。だが、何事も一つずつ、だ。会ったらいいからさ、それとなく伝えてみてくれるかい。おっかさんを探している、佐七がいるってこと」

「あい」

たまは頷いた。それくらいお安い御用だ。

さらに佐七から話を聞いたが、やはり手がかりはろくに得られなかった。佐七がまだ幼い頃に離別していること、どこかの店の娘で、しかし店の名前ははっきりしないこと。

「そういえば、蝶の簪だ。鼈甲のやつで、親父、一緒になる前にうんと奮発しておっかさんに贈ったらしい。おっかさんはいつも身に着けていたって聞くよ」

手がかりはそれくらいだった。

帰り際、佐七は「くれぐれも、何かあったら教えてくれよ」とたまに頼み込んで、またもたまはこれを「あい」の一つで安請け合いました。遠ざかっていく佐七の背中を見送りながら、どうしたものかと腕を組む。

夜四郎のあやかし退治の話に、佐七の名前しか知らない人捜し。話を聞くと言ったからには、できることはしたい気持ちに嘘はない。とは言え、たまは一介の町娘なのだ。できることと言えば風聞を集めて、教えてあげるくらい。

せっかくなら夜四郎に協力してもらおう、と思いついたのは翌日のことだった。

たまとて、夜四郎を全面的に信頼したわけではないものの、彼の事情が気にかかっているのも確かである。

——身体がないって、どんな感じなのかしら。

たまから見れば、彼は普通の人間と変わらない。服を着て、しっかり受け答えもして、物にも触れられる。人の目に映らないこともない。

助けられたことも確かなので、礼のために団子をいくつか差し入れることにして、

包みを手に通りに飛び出した。「あんまり遅くなるんじゃないよ」というおかみさんの声に「あい」と元気に返して、足取り軽く道を辿っていく。

——ええと、薬屋、一膳飯屋を通り過ぎ、小間物屋さんの向こうで辻に出て……件の辻に差し掛かるとき、無意識に手に力がこもる。

そこに女の背中を見た。背の高い、白い肌の女は考え込むように顔を伏せていた。時折あたりを見渡しているその背中に、たまは見覚えがある。

「あらっ」

女の方もたまに気がついてたらしい。少し眉間に皺を寄せて（彼女は少し目が悪かったから、遠くを見るとときによくこの表情になった）、すぐに微笑みを浮かべた。

「おたまちゃん？ まあなんて懐かしいの」

「お滝さん！」

たまにとつてもとても懐かしい人がそこにいて、思わず駆け寄った。

三十路みそじすぎの、よい香りを纏ったその女は、隣町の小間物屋の一人娘だった。

たまは幼い頃、何度か隣町に行った時に遊んでもらっていたのでよく覚えている。遊んでもらって、祭りにも連れて行ってもらったこともあって、季節ごとに何度か文のやりとりもして。

けれどこのところはすっかり疎遠になってしまっていた。

「すっかりお姉さんになって……その目はどうしたの」

「なんともないですよ、似合っていないませんか？」

「ええ、素敵。芝居に出てきそうなくらいに。あなたのこと、気にしていたのよ。元氣そうでよかった」

滝は柔らかに微笑んだ。お滝さんこそ、とたまも笑った。

幾分か身長伸びたたまと違って、滝は記憶の通りで変わらないように見えた。

「お滝さんはお出かけです？ よかったら志乃屋にどうでしょう」

夜四郎に会いに行くのは今日でなくてもいい、せっかくの再会を楽しもうと思ったのだが、滝はゆるりと首を振った。

「ごめんなさいね、おたまちゃん。……人を捜しているのよ」

聞けば、滝は最近近くに越してきたらしい。後であいさつに行くと言っていたが、寝耳に水だった。どうにも人捜しのためで、隣町で捜して、この町で捜して……とずいぶん熱心に捜し始めたらしい。

「噂を聞いたのよ。あの人が戻ってきたって」

「お滝さんは誰を捜しているの？」

「男の人」

「たくさんいますよう」

滝はからかうようにころころと笑ってから、ゆつくりと目を細めた。

「おたまちゃん私の旦那に会ったことはあったかしら。まだうんと小さかったものね」

そう聞かれて、たまは固まった。

滝の身に降りかかったことは聞いていた。

何年も前のこと、滝は夫とまだ小さな子供を同時に亡くしていた。流行り病だったらしい。仲のいい家族だったものだから、その悲しみはとても深く、誰にも会わないようになってしまったのだ。

何通か手紙を送り、会いにも行っではみたが、結局は彼女をおもんが慮って「しばらくはそっとしておきましょう」と、そういうことになっていた。

たまは答えに窮して黙りこくってしまう。あれから滝の時間は動いてないのか、そんな時になんと声をかけるのがいいのかしら——悩んでいると、滝自身の明るい声が出た。

「そうそう、ここで会えたのも何かの縁だね」

助かった、そう思いつつも、そういうえば滝の表情が明るいことに気がつく。前に見かけた時は憂いのある横顔だったが、今は目を爛々と輝かせて吹っ切れたようにも見

えた。

きつと良いことがあったのだ、とたまは己を納得させた。それが何かはわからないけれど。

「ね、たまちゃん、うちに遊びにいらつしやいな」

突然降ってきた声に咄嗟には反応できずに、

「え？」

たまは首を捻った。それを拒絶だと思ったのか、慌てて滝は言い加えた。

「ああ、ごめんなさい、勿論今日じゃなくてもいいの。あなたはこの町に詳しいでしょう？ 色々と教えてくれないかしらと思って」

今日は用事があるんでしようし、また今度、と滝はたまの手の小包を見遣った。たまは先ほどまでの空気がすっかり消えたことに胸を撫で下ろして、笑顔で頷いた。

「あい、おまかせを！」

「引き止めちゃってごめんなさいね」

「ううん、お滝さんに会えて楽しかったもの」

「まあ、嬉しいことを言うのね」

そう言うのと、滝は小さな紙片をたまに渡した。目を走らせて、それが滝の住む長屋の場所だと理解する。

こんなところに長屋なんてあったかしら、と思いなながらも、それを大切に受け取った。

「おたまちゃん。きつと遊びに来てね」

たまは小さく頷いて滝の背中が雑踏に溶けるまで見送った。

——それにしても人捜しが多い。

そう考えてはたと立ち止まった。

そういえば、佐七が探していたのも「お滝」だったと思い出したのだ。それから、あの美しい人もまた「お滝」なのだと。



破れ寺への道はすんなりと見つけられた。小川にかかる橋を渡ると変に人気がなくなるが、不思議と恐ろしい感じもしない。傾いた門、鳥だけが客の境内、あの晩の通りの寺に夜四郎はいた。

やって来たたまを見て、夜四郎は大いに笑った。

「まさか本当に眼帯娘になっているとは。支障はないのかい。おまえさんの方から俺を訪ねてくるなんてなあ」

「結構いけるですよ。先日のお礼がまだだと気がついたので」

言ってから、たまは改めて寺の中を見た。生活感のまるでない空間である。水甕みずがめの中身すら怪しいが、流石に空ではないらしい。とは言え、あるものと言えば欠けた湯呑みと文箱、大量の古紙と、傾いた文机、それくらいのものである。

辺りを見回していると、視界が夜四郎に遮られる。はっとして、たまは団子を手渡した。

「夜四郎さまは、こちらに暮らしてらっしゃるのです？」

「うん、そうだ。あやかしの話があれば此処に来てくれ。俺がいない時は、紙に書き残してくれりゃあ、俺の方から志乃屋に行く」

やはり、ここに暮らしているので間違いないようだった。

それにしても、なんと生活感が薄い。寝具もないのではないだろうか？ たまは眉尻を下げた。思ったよりもうんと苦労しているのだろうか。

——親切なお待さまだし、ほんの少しくらいなら、お手伝いするべきかもしれないわ。だっていつまでも身体がなくてこんな暮らしをしていたんじや、大変なもの！ 相手がいかにも困っていると、たまはあつさりと絆されるようにできている。

夜四郎が気を利かせてせんべい座布団を濡縁ぬれえんに並べてくれたので、たまはそこに腰を下ろした。あやかし話はないのだが、来た用事はある。

「それで、何か聞きたいことでもあったんだろう。わざわざ来るってことはさ」

「夜四郎さま、ご存知です？ いま、人捜しが多いのですよ」

「今も昔も多いがなあ。たまの周りで多いのかい」

夜四郎は意外にも大人しく話を聞いてくれるつもりらしい。どんなものかと聞かれて、たまは聞いた話を語り出した。

田舎から出てきた佐七が探す「お滝」さん。誰かを探すために出てきた、たまの親切な「お滝」姉さん。

しかし、滝の息子はとうに亡くなっているはずで、佐七が滝の息子である可能性はないのでは、とたまは思っているということ——皆から聞いた滝の話が、嘘でないのなら。

「二つの人捜しか。しかし、たまたまじゃないのかな」

「そう思います。でも、お滝姉さんが、佐七さんの捜すお滝さんならいいのにつて思いうんです。優しい二人が、恋しい人に再会できるのはいいことですもの」

「んん、そいつは……どうかなア」

夜四郎は言葉を濁す。頭の中で何かをこねくり回しているらしく、視線は遠くに向いたままだ。何か、思い当たることがあるのだろうか。

「違うのです？」

「いつの時も、捜す側も捜される側も同じ思いとは限らないからさ」

夜四郎は首を傾げたままのたまを見る。指を一つずつ立てながら、たとえ話を列挙した。

盗人と同心、仇とそれを討つもの、あるいは生き別れた親子、恋人。それぞれに事情があり、それぞれが目的のために憐憫を誘うようにわざと演技、関係性を偽る人もいたかと思えば、あるいは真に切実に捜していることもある。

「片方だけの言い分じゃ本当のところは見えんさ。だから、人捜しなんて軽率に引き受けるものじゃあない」

たまは口を尖らせた。

「でも、夜四郎さま。親子でしたらそんなに悪いことはないですよ。愛する家族に会えるんですもの」

「すべての家がそうとも限らないよ、おたま。一言に家族と言っても、どんな形かは外からじゃわからないものだ。思い込みはもつたないな、おまえさんは人よりよく見える目を持っているのに」

でも、と言いかけて、やめた。夜四郎を見上げると、どこか寂しそうな色がそこにあったのだ。たまは出かけた言葉を飲み込んだ。

「二つの視点を持つことだ、おたま。追う側、追われる側、どちらにも理由があるの

は当然だろう。絡まったものを見ないと、そいつを解くこともできない」
 夜四郎はこの話は終わりだとばかりに、たまから受け取った包みを広げ始めた。空気を变えるように楽しそうに笑いながら、彼は団子に食らいついた。

「それで、なんだ。おまえさんはちゃっかり俺に人捜しを手伝えと？」
 口の端を指で拭ってから、夜四郎はたまの頼みを引き受けた。

「まあいいとも、この話、俺にも囁かせてもらおうか。気になるしな」
 いいのですか、とたまは目を瞬かせた。あわよくばとは思っていたのだが、まさか本当によいとは思わなかったのだ。あつさりと承諾した彼を拝むように見上げる。

「夜四郎さまは、存外に面倒見のよいお方です」

「存外」とは心外だな。……おまえさんと話していると懐かしいような心持ちになるからかな、要らん世話を焼きたくなるのさ。うんと若返ったようだな、楽しいんだ」
 それとまあ、団子の礼だと言つて夜四郎は優しく笑った。その団子が先日の礼の品なのだが、彼としてはそうでもないらしい。

この口ぶりでは、弟か妹がいて、たまに重ねているのかもしれない。あるいは娘か——思えばたまは彼のことをまるで知らない。まさか身体を失つて、二度と家族に会えないのだろうかと思像して、ちりりと胸が痛んだ。

夜四郎はたまを橋のたもとまで送ると言った。二人並んで歩く。

「まずはお滝さんって人に話を聞きたい」

「あい」

「いいかい、あまり首を突つ込むなよ、おたま。おまえさんはか弱い。あやかしもそうだが、人間の妙な事件に巻き込まれても、困るからな」

やはりこの人はたまをいざという時の頼みの綱にしている節がある。まあそれでもいいか、とたまは思い直した。

たまにできることは小さいが、滝の力になりたいという気持ちは変わらない。佐七のことだって、できることはしてあげたい。また昔のように、滝と笑い合えればそれがいい。

——それにしても、お滝さんの捜している人って誰なのかしら？

参

志乃屋の店先で、難しい顔をしている佐七の相手をすることは、すっかりたまの日常になっていた。

さすがに日がな一日ここにいるわけではないのだが、暇を見つけてはやって来て、

通りの人を見つめたり、店の常連客に話を聞いたりしている。店にも早くも馴染んで、気に入ってくれたなら嬉しいとたまは思う。

佐七の手には、やはりあの拙い姿絵がある。

「佐七さん、なにか進展はありましたか？」

聞けば、彼は決まって苦笑する。残念そうに頭を振った。

「二、三人、お滝さんを訪ねてみたんだけど、おっかさんにはまだ会えてないよ。参ったなあ、この辺りの町だって親父は言っていたのに。引越しちゃったかな」

類を聞いて、親父にもっとよく聞いておきゃあよかった、と佐七は呟く。聞いたところによると、彼の父は五年前に亡くなったという。佐七も母との記憶はあるにはあるのだが、幼くて、細かい話は思い出せないのだと言った。

たまは腕を組む。佐七とて、聞ける範囲は限られている。たまも聞けたとしてもこの志乃屋の周りが精々だろう。そうなると、もっと多くの目が必要になる。

「佐七さん、その姿絵を迷子石に貼ってはどうでしょう」

「この絵で？ うーん、まあ、同じようなものを描いてもらって貼るのはありかもしれないかなあ」

「そうですよ。佐七さんのお名前と、いる場所を書いておけば、もしかしたら向こうから見つけてくれるかもしれません！ 生き別れた子供ですもの、きつと会いたいに

決まっています」

「そうだいいいな」

先に場所だけでも確認しておきたい、という佐七に、やはりたまは安請け合いをして案内役を買って出た。店の方も忙しいことはなく、いつておいでとあっさりで見送られた。

佐七が食べ終わるのを待ってから、二人は並んで歩き出した。交わされるのは他愛のない世間話になる。

「そういえば佐七さんはどちらに住んでいるのです？」

「すぐそこの長屋だよ。一番端の、マルに『佐』の字の部屋だ。何かあったら訪ねて……と言いたいところだけど、居なかったら青井屋の方にいる。一膳飯屋の——知ってる？」

「ええ、田楽が美味しいって聞いています」

たまの腹も同意するかのようにクウと鳴る。佐七は笑った。

「うん、ウチのは本当に美味しいから、今度食べに来なよ。しかし、すまないなあ、どうしても店の近くとか、そういった場所ばかり探しちゃってます」

長屋の面々に話を聞いてもわからないという。似たような話は聞くような気もするのだが、やはり、生き別れた息子のいるお滝〴〵程度では話がぼんやりとしすぎている。